『ヴァギナ・モノローグ』と題する朗読劇が、青山通り沿いの国際連合大学に隣接する東京ウィメンズプラザで2月28日（日）午後に開催。体軀を黒い衣裳で包み、脚の長い椅子に座った木内みどり、北原みのり、安藤玉恵、カワムラユキ、ともさと衣、窪真理の6名が1時間半に亘って熱演しました。

『The Vagina Monologues』が原題の脚本は、女性の性を巡って200名を超える人々にインタヴューしたイヴ・エンスラーが手掛けた作品です。1996年にオフ・ブロードウェイで初演。以来、48カ国語に翻訳され、140カ国以上で上演されています。メリル・ストリープ、その友人で『ガープの世界』がデビュー作のグレン・クローズも登壇しています。

日本での初演は2004年。爾来、さまざまな演出家と出演者が関わってきました。今回は「V-DAY Tokyo 2016」を冠して企画を奥山緑、翻訳を常田景子の両名が担当しました。「毎年2月14日

連載 第17回

ささやかだけど。たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

『ヴァギナ・モノローグ』とフランス料理店マダムに見る新しい「男女共同参画」

レイアウト――宗利淳一デザイン

を中心とした前後に開催される、女性に対する暴力根絶を目的とした地球規模の市民参加プロジェクト」がV-DAY。VはValentine、Vagina、Victoryを意味します。

劇作家で俳優、そしてジャン＝ポール・サルトルが提唱した意志的実践的社会参加＝アンガージュマン＝engagementの活動も続けるイヴは、1998年創設した「V-DAY期間に女性保護団体等に寄付する目的で大学や地域で公演を行う場合、著作権料を受け取らずに上演許諾を出し」、一昨年までの段階で1億ドル≒110億円を超える寄付を集め、1万3千以上の地域の団体を世界中で支援する成果を生んでいます。

とまれ日本では、木内みどりさんが劇中で指摘したように、男性器を意味する〝おちんちん〟、その俗語としての〝ぽこちん〟を始めとする複数の呼称が活字媒体のみならず電波媒体でも飛び交う一方、「お」の接頭語で始まる女性器を意味する単語は、禁忌の対象。

他方で外来語のヴァギナ、或いはクリトリス、更には俗語としてのプッシーの何れも大手を振って徘徊しているのです。

2月8日の衆議院予算委員会で「女性」の総務大臣が、放送法第4条違反を「理由」に電波法第76条に基づき放送局に「停波」を命じる可能性に言及する前からの不可解な現実です。「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」と謳う放送法第4条を「根拠」に、「フェミニズム」論者も「攘夷保守」論者も呉越同舟で国民戦線を結成し、女性器に関する日本古来の呼称の「解禁」を「女性」大臣に求めるべきかも知れません。

僕は中学時代に技術家庭科の教科書で、雄ネジとは差し込む側、雌ネジとは差し込まれる側と知り、得心したものの、その即物的呼称に少なからず違和感も抱きました。この点に関しては「攘夷保守」論者と一線を画して「フェミニズム」論者は、「新しい歴史教科書」ならぬ「新しい名称」での記述をプロレスラー出身の「男性」大臣に求めるべきかも知れませんね。

とは言うものの、今東光氏の弟にして、初代の文化庁長官、同じく初代の国際交流基金理事長を務めた今日出海氏が、恐らくはパリに於ける唐招提寺展開催に際してのフランス政府主催晩餐会で、「イデミ・コン」でなく「イデミ・イマ」として紹介された逸話は、洋の東西を問わず、禁忌は根深いと痛感させます。馬鹿者を意味するフランス語のconは、女性器の隠語でもあります。

閑話休題。「女性の地位と権利」の在り方を提起する朗読劇を鑑賞しながら僕は、そのフランスで2月5日発売の『Le Guide MICHELIN France 2016』で、1991年から三つ星を維持してきた料理店が二つ星に降格したのをふと想い出しました。

ルレ・ベルナール・ロワゾー。賞ての屋号はラ・コート・ドール。ワインで知られるブルゴーニュ地方の、人口約2500人のソーリュー村で営まれる料理店です。奇しくもタイヤ会社のミシュランが本社を置くフランス中部のクレルモン＝フェランで1951年に生を受けたベルナール・ロワゾーは16歳で料理の道に入ります。

ロワール地方のトロワグロで修業を積んだ後にシェフを務めたパリの店が、『ゴー・ミヨ』で知られる料理評論家のアンリ・ゴーとクリスティアン・ミヨから高く評価され、頭角を現します。

而してバターやクリーム、オイルに象徴される「フランス料理」とは異なり、肉塊を始めとする素材の焼き汁に水を加えてソースを作る〝キュイジーヌ・ア・ロー＝水の料理〟をソーリューの地で編み出し、寵児となるのです。

三つ星の獲得は1991年。僕は1994年7月4日に当時のガールフレンドと訪れています。接客を担当するマダムのドミニクが印象に残ります。ジャーナリストとして取材に訪れた彼女は、彼の才能に〝魅了〟され、再婚。料理一筋で寡黙なベルナールと異なり英語も独語も堪能。如才なき接客の彼女に、遠来の客が今度は〝魅了〟されます。二つ星から三つ星へと引き上げた原動力です。

往時36歳だった僕は、感じました。世界的な料理人の妻であるだけでなく、その著名なる人物を演出し続ける名伯楽としての自分にドミニクは悦びを感じているのだと。労多くして益少なき料亭の女将とも異なる、新しい「男女共同参画」のパワーバランスです。

経営者や芸術家に代表される著名人の妻は、パーティの場に同伴しても、夫あっての自分です。料理人の妻との違いです。尤もベルナールは2003年2月に自害します。同年版『ゴー・ミヨ』で20点満点中19点から17点へと評価が急落したのを苦にして。

その後も彼女は店名をルレ・ベルナール・ロワゾーに変え、二番手だったパトリック・ベルトロンと共に昨年まで三つ星を維持し続けます。これも又、演出家としての自分に課せられた「女性の地位と権利」の新たな運命だと言い聞かせ、苦い悦びを感じていたのでしょうか。

たなか・やすお……1956年生まれ。作家。2000年から06年まで長野県知事を務める。
近著に『33年後のなんとなく、クリスタル』など
田中康夫ダイレクトメール→ tanaka@nippon-dream.com URL→ http://www.nippon-dream.com/